

## = 誇り =

年が明けたと思ったら、もう2月。いよいよAP20春季取り組みがはじまる。取り巻く環境は、新冷戦といわれる米中貿易摩擦をはじめ、原油・原材料価格、為替レートの激しい動き、また、超少子高齢社会の中で内需の減少や海外現地生産化の拡大という課題も加わり、海外発のショックとして、かつてとは形を変えた荒波が押し寄せている。

そのことを承知の上で今次取り組みに臨むこととした。それは、経済の好循環の軸となる個人消費をどの様に回復基調へと導くのか、次なる産業の担い手を確保し、職場の活力発揮をどう引き出すのかなど、大きく変わりゆく社会の中で、人への投資のありようを労使がそれぞれの立場から真摯に議論し、互いの、もう一踏ん張りで解を導き出すことが産業・企業、そして、わが国経済・社会の持続的発展の土台となり得るとの判断からである。私たちはAP14春季取り組み以降、労使の真摯な議論のもとで6年連続して賃金改善を果たしてきた。その重みも、負担も、十分承知している。それだけに、こうした労使の懸命な取り組みの結果を確実に、それぞれの好循環に組み入れていくためにも継続性が大きな意味を持つとの思いからでもある。

ものづくり産業の労使は、オイルショック、バブル崩壊、リーマンショックと、形を変え世界の経済・社会が大きく揺れ動く中で、もがき苦しみながらも、あらゆる経営施策を推進し企業基盤の強化と雇用の確保に取り組んできた。そして、そこには労使双方の力が相まってつくりあげた変化への対応力があったということをおぼえてはならない。

1月12日に催された相浦機械労働組合の結成10周年記念式典・祝賀会に出席してきた。2008年、当時九州地区最大の負債を抱え、経営破綻した辻産業を前身に持つ組織である。更生手続き中の同社の受け皿会社として大島造船が名乗りを上げ、また多くの関係する方面の支援の下で新会社「相浦機械」として新たな船出をした。そんな思いの詰まった周年行事。祝賀会終盤、地元の音楽家の歌に合わせ、お招きに預かった来賓も、組合員も肩組みながらリズムをとる、その真ん中に、当該の労使トップの姿があった。厳しい厳しい船出から10年、その10年の重みを誰よりも知る委員長と社長である。胸を熱くしながら、その姿を写真に収めた。

相浦機械の会社ホームページで社長は言っている。「大切にすべきものはいろいろありますが、会社で一番の核となるのは『人』です。(中略・・・)1人1人の社員の健康、努力、情熱が欠かせません。どんなに大きな機械も、それを作るのは人間の力である。いつもそのことを忘れないようにしています。ふるさとや家族を大事にしながら世界のために働く、強くてやさしい社員たち。その1人1人にとって、相浦機械がいつまでも働きやすく、わが子に誇れる職場であるように。そのために努力し続けることが、社長としての使命だと考えています。」

私たちに関わる全ての課題が思いだけで解決できるとは考えていない。しかし、AP春季取り組みの意義は、労働諸条件の改善のみならず、競争力強化と働き方、一人一人のやりがいと成長、労使が直面する諸課題を徹底して話し合い、確かな将来と強い信頼関係を築き、皆が笑顔になれる好循環を形づくる場でもある。働く仲間の活力と気概と誇りが明日を支える原動力であることを信じてやまない。

ご安全に

2020年2月1日

日本基幹産業労働組合連合会  
中央執行委員長 神田 健一